

質的方法論研究I

2016年度受講予定者

第一回9月28日に向けてのプレ
準備

恒吉僚子(教育学研究科・教授)

9月28日の準備

- * 例年に比べて圧縮された日程になっております。ターム制で今後続きます。そのため、同じ効果を出すために、PPによるプレセッションを時々入れます。
- * 第一回のプレセッション(今回)は、恒吉・秋田一章とホワイトの文献に目を通していただくお願いです。
- 図書館西の比較教育社会学コース事務室に一部コピー用がありますが、コース事務室(hikyosha@p.u-Tokyo.ac.jp)にお名前とメールアドレス(月曜日休み、火曜日10-5時)お伝えいただければ、ドロップボックスリンクをお送りいただくようお願いしてあります。
- ドロップボックスのプレ講義一回とあるのが初回講義の前にお読みいただきたい上記資料です。

お考えいただきたいこと:フィールドワークを行うとはどのようなことなのか?書いていらっしゃる必要はありません。以下のようなポイントを参考に考えてきてください。第一回講義で解説します。

- 素材: プレ1の資料
- Whyte, William Foote (1993), *Street Corner Society: The Social Structure of an Italian Slum*, fourth edition, University of Chicago Press, Annette Lareau(2000)*Home Advantage: Social Class and Parental Intervention in Elementary Education*, second edition, Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers.からの引用と調査者がどのように調査したかの巻末を読んで、フィールドワークについて考える。
- **Street Corner Society**
- **エスノグラフィーの古典(都市社会学、人類学)**
-
- 解説:アメリカのイタリア系スラムに参与観察を行ったエスノグラフィーの古典的研究。スラムなりの秩序を、青年たちに密着し、参与観察を行いながら長期にわたって分析した。その後、ホワイトが著名になる中で、経済的に恵まれなかったキーインフォーマントであったドックとの関係、研究対象に対する倫理的責任や方法論やスラムの分析についても、質的方法を考える上で参考になる。
-
- 1)リサーチ・クエスションがどのようにフィールドとデータとの対話の中で展開しているか(データの厚いところに焦点を移動)。
- 2)どのようにアクセスし、有効なアクセスには何が必要であったのか。
- 3)キーインフォーマントの意味、アクセスと可能にする人々、彼らの立場
- 4)研究者の役割(参与観察における)
- 5)ラポール、オーバーラポールの問題について
- 6)当事者視点とは?
- 7)フィールドでの長さやつかり方。きりをつけるのか、いつ、どのように?あるフィールドで学ぶことが飽和状態になるとはどのようなことなのか、テーマとの関係は、フィールドとの関係においては?
- 8)研究の実践性について。ドックとのその後の関係が意味すること(何のための誰のための研究か)。当事者が誰も読まない研究の意味。アクション・リサーチ。
- 9)倫理的な問題について。研究の意図について、研究の結果について、研究がもたらす影響について。

第一回講義 プレ1を受けて考えるいくつかのポイント(予告)

* ホワイトの記述から考える

アウトサイダーとインサイダー アウトサイダーのインサイダー化

アクセス キーインフォーマント(その人の立場) 観察者効果

ラポールとオーバーラポール トライアングレーション

参与観察 インタビュー 内容分析 アクションリサーチ

* 第一章から考える

質的、量的の違いや相互補完性—データ収集と分析の同時並行性、
データとリサーチクエスション、参考文献の意味

質的方法の特性—プロセス、当事者視点、実践性・・・

対象者や現場との関係 「もどす」ものは何か 不毛性議論(学問の進展、実践への関与等)